

# Bjorn Lomborg *Cool It!* (2007) 査読評価書

平成 19 年 8 月 30 日

山形浩生

## 1. 概要

『環境危機をあおってはいけない』で世界の過激な環境保護論に冷や水を浴びせ、もっとデータに基づいた意味のある環境保護運動を訴えた、ビヨルン・ロンボルグの新作。

今回は地球温暖化に焦点をしばっている。地球が温暖化しているのは事実だし、それが人間によって引き起こされているのも事実のようだが、これは 100 年単位の問題なので 100 年単位で対応すべきであり、拙速で効果の薄い京都議定書のような施策を勢いだけで導入してはならない、と訴えている。

主張自体は、『環境危機をあおってはいけない』のものほとんど変わらない。重要なのは人々の生活水準を上げて豊かな生活を可能にすることであり、温暖化防止だけを自己目的化してはならない、という点は変わらない。本書の価値は、一人歩きしている温暖化の部分だけをとりだしてコンパクトにまとめた点にある。

目下日本でも話題になっているテーマでもあり、短くて手頃なので、早急な訳出が望ましい。

## 2. 著者について

著者ビヨルン・ロンボルグは、1965 年生まれのデンマークの統計学者。デンマークのアーハウス大学政治科学部における統計学担当助教授だったが、『環境危機をあおってはいけない』(2001) により世界的に大きな注目を集め、環境問題について語る時に避けては通れない人物の一人としていちやく有名となり、2004 年にはタイムズ誌の選ぶ世界でもっとも重要な百人の一人にも選ばれている。

デンマークの環境評価研究所所長を経て、現在はコペンハーゲンビジネススクール教授。また世界における重要課題の優先順位を考える『コペンハーゲンコンセンサス』の組織と編纂でも有名。

<http://www.lomborg.com/>

<http://www.copenhagenconsensus.com/>

### 3. 章ごとの要約

#### 序章

温暖化は起きており、人間がたぶん原因なのはまちがいない。しかしそれに過剰反応して、無意味な施策をしたり、過激な施策を支持しない人をすぐにファシスト呼ばわりするようでは何の意味もない。いま重要なのは、冷静になって問題に取り組むこと。本書ではそれを試みる。

#### 第一章 ホッキョクグマは災厄の前兆か？

アル・ゴア『不都合な真実』では、氷が溶けてホッキョクグマが溺れるようになっていく、という話が温暖化の危険としてセンセーショナルに扱われている。でも実際にこの話のもとになった報告を読むと、実は話がぜんぜんちがう。クマが溺れたのはごく一部（それも寒冷化した地域）で、全体としてホッキョクグマは増えている、というのが報告の要旨。温暖化に関する報道はしばしばこのように歪められている。

確かに温暖化は起きており、人間がたぶん原因なのはまちがいない。しかし、温暖化によるよく言われる脅し（天変地異、すさまじい台風、地球荒廃）はほとんどが誇張されすぎたウソ。またその対策とされる京都議定書などは実現も無理だし、実現できても効果がない。そしていまの地球には、温暖化より緊急性の高い問題がたくさんある。本書ではこの論点を詳細に述べる。

#### 第2章 温暖化は確かに起きているが……

温暖化といっても、いちように暑くなっているのではない。海よりは陸地が暑くなるし、暖かいところより寒いところ、昼よりは夜のほうが温度が上がっている。温暖化の最大の影響は、たぶん冬にセーターが少なくてよくなることくらい。2003年夏にヨーロッパが熱波におそわれて死者が出たのを騒ぐが、その分以上に冬の死者は減っている。それに、暑くなったら人間は一世紀もあれば生活習慣を少し変えたりして適応する。拙速に温度のほうを変える必然性はない。

そして温度をどうにかする対策はコストばかりで実効性のないものばかり。京都議定書などはまったくダメ。ポスト京都なんてのは、そのダメな方針をさらに大規模化するという間抜けきわまる方策。見込みがあるのは炭素税の導入だが、これはかなりの政治的困難がある。他にも重要な課題はあるし、順番を考えていかないとダメ。

### 第3章 温暖化の害とされるものは？

温暖化の害とされるものはいろいろあるが、多くは誇張されている。

「氷河が消える」：氷河は数世紀単位で増えたり減ったりするもの。そして温暖化して氷河が減った中世温暖期は、地球文化の華開いた時期だった。大規模河川の水源となる氷河は、確かになくなると困るが、温暖化は解けるのをはやめるので、氷河がなくなるまでにはかえって水量を増やす効果もある。

「海面上昇」：2050年までにせいぜい10センチというところ。世界中が水浸しなんかにならない。ゴア『不都合な真実』は、海面が6メートル上昇とかいう誰一人主張していない状況をCGで見せてひどいものだ。そして南極の氷がとけているのは、各種の条件がかさなって、むしろ海面の低下に貢献している。そして、人間だって水面上昇に各種の対抗措置がとれるのだ。

「異常気象の危機」：2007年のIPCC報告でも、こんなことは起きないって書いてあります。カトリーナ台風だって温暖化のせいなんかじゃありません。被害が増えているのも、人が豊かになってビーチサイドに住みたがるようになっているからです。

「河川氾濫」：根拠なし。

「ヨーロッパに氷河期再来」：映画になったりして有名だけれど、実は最も根拠薄弱な代物。絶対起きません。海流が止まったとしても欧州は温暖なままです。

「マラリアなどの流行」：いまマラリアがアメリカや日本にないのは、別に気候のせいではない。もともとは「おこり」などと呼ばれて存在していたのを、防虫や殺虫剤で蚊を駆除して根絶しただけ。昔できたことだから今だって当然できる。

「水不足」：砂漠化などの局所的な影響はあるかもしれないが、温暖化したら氷がとけるんでしょ？ そうしたら出回る水は増えるので、世界的には水不足は減る方向に動く。

### 第4章 地球温暖化をめぐる政治

海面上昇が問題というけれど、それなら海面が上昇して困る人をどう助けるか考えよう。効果のない温暖化対策なんかにかまけているのは、そもそもの発想が変。

やるべきことは、研究開発の大幅な増加。京都的な、規制を増して炭酸ガスカットという発想はまったく効かない。一方、京都議定書は、エネルギー効率上昇とか再生可能エネルギー研究といった話は一切でておらず、こうした分野の研究は実質的にほぼストップしたままなのだ。そして変な脅しはもうやめよう。冷静な議論ができなくなるだけ。結果として、ちょっとでも京都に反対といえはすぐに右翼扱いするようなひどい状況になってしまっている。そしてそれに便乗したスターン報告のようなひどい代物が人口に膾炙してしまっている。

## 第5章 結論：冷静な対話を！

冷静な議論に基づいた冷静な対話を取り戻そう。炭酸ガス排出対策としては、トンあたり二ドル程度の炭素税が最も有効。そして温暖化以外の重要なところに目を向けて、本当に最大の人々の生活水準を上げる手段を講じよう。ずっと安く、ずっと実効性のある施策はまだまだたくさんある。

### 4. 本書の見所

本書の長所は、相変わらずの冷静な筆致と、すべて出所にたどりなおして確認する律儀さ。『不都合な真実』などでもっともらしく提出されている各種の警鐘をきちんと見直して、それがいかに歪められているかを指摘する筆致は、『環境危機をあおってはいけない』以来不変のもの。

また地球温暖化をめぐる各種の議論が、そのような細部への気配りを見せつつきわめてコンパクトに書かれているのも魅力。230 ページしかない本だが、そのうち本文は 170 ページほどと大変短い（残りは書誌やデータ出所）。きわめてお手軽によめる、たいへんに良い本となっている。

内容的に、あまりセンセーショナルなものはない。地球は危機に瀕しているとは叫ばないし、また地球温暖化はウソだともいわない。ただし、温暖化対策論が現在のように熱くなりすぎている状況では、その温厚さと冷静さがかえって新鮮といえる。

『不都合な真実』がそれなりに売れているところで、そのウソをきちんと指摘する本のニーズは大きいと思われる。また武田『環境問題は どうしてウソがまかりとおるのか』の人気などから見ても、こうした議論が受け入れられる余地は十分にあると思われる。そうした雰囲気が消えないうちの、早急な訳出が求められる。

### 5. その他

本書にはイギリス版もあり、アメリカ版より少し長い。そちらも見たうえで、もし重要な加筆部分があるなら、そちらを訳出することも検討すべき（内容的に同等なら、おそらくコンパクトさを重視してアメリカ版のほうがよいと思われる）